

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★



Data

脚本・監督：イ・ジョンボム
出演：ウォン・ビン/キム・セロン
/キム・ヒョソ/キム・テフ
ン/キム・ヒウォン/キム・
ソンオ/Thanayon
g Wangtrakul
/ソン・ヨンチャン/イ・ジ
エウォン

👁️👁️ みどころ

なぜこの男が、少女から「アジョシ」と慕われたの？それは、互いに「孤独」の臭いがプンプンしているから……。韓国版『レオン』はちょっと誉めすぎだが、『母なる証明』（09年）の「オパー」から「アジョシ」に華麗に変身したウォン・ビンのアクションは見どころ十分！さらに、興味深いのはワルたちの悪業のサマ。ここまで生々しい描写は韓国映画なればこそだろう。

しかして、ラスト直前のあっと驚く自殺（未遂）シーンを含めて、本作のラストをあなたははかに評価？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ 「アジョシ」とは？オパーからアジョシに脱皮！ ■□

韓流ドラマにのめり込んでいる日本人のおばさんたちは「オパー」という言葉をよく知っているが、実は韓国旅行体験のある日本人男性もこの言葉をよく知っているはず。ちょっと怪しげな店が立ち並ぶ繁華街での呼び込みは、日本ではもっぱら「社長さん！」だが、韓国ではもっぱら「オパー」つまりお兄さん？日本のバブル時代に韓国旅行をした多くの日本人男性は、「オパー、いい娘がいますよ」と声をかけられたことがあったのでは？

本作のタイトル『アジョシ』は「おじさん」という意味の言葉、韓国四天王の1人で、09年の『母なる証明』で3年ぶりにスクリーンに復帰したウォン・ビンはまだまだオパーだったが、本作では華麗にアジョシに変身！とはいっても、『母なる証明』でウォン・ビンが演じた役も暗かったが、本作でウォン・ビンが演じる孤独な質屋店主チャ・テシクも暗い。前髪が右の目をほとんど隠しているから、このヘアスタイルだけは8月7日にテアトル梅田で観た『ツィゴイネルワイゼン』（80年）で亡原田芳雄が演じた役とよく似てい

る。

なぜこんなうっとうしい髪型を？それはある意味では孤独を表現するためだが、ラストに向けて心を通わせていた孤独な少女チョン・ソミ（キム・セロン）を奪還するために敢然と立ち上がる時に長髪をわざわざきれいにそりあげるシーンを見てみると、それは彼の肉体美とハンサムさを際立たせるためでもあったようだ。てなわけで、本作は何よりも「オパー」から「アジョシ」に変身した（？）ウォン・ビンのアクションの魅力を、これでもかこれでもかと思わせてくれる映画だからそれに注目！

■□■本当のワルはダレ？彼らはどんなワルを？■□■

映画冒頭、ソミの母親であるヒョジョン（キム・ヒョソ）の色っぽいダンスシーンをチラリと見せた後、男と共に麻薬を横取りしたヒョジョンが麻薬界の大物オ・ミョンギョ社長（ソン・ヨンチャン）から追われるストーリーが描かれる。麻薬取引の現場を仕切っていたのはマンジョン兄弟の兄マンソク（キム・ヒウォン）だから、ミョンギョ社長からその不始末をボロクソにののしられたマンソクは大ムクレ。このワルたちの執拗な報復活動によってヒョジョンは何とも悲惨な死体となって発見されたうえ、質屋店主としてヒョジョンからバッグを預かっていたテシクは、その中に麻薬が入っていたため、その争奪戦に巻き込まれることになり、大迷惑。これだけなら、世の中によくある麻薬取引に素人のヒョジョンがちよっかいを出したために起きた悲劇だから、元秘密工作員だったことが後に明かされるテシクの出番など本来ないのだが、さて本当のワルはダレ？また、彼らはどんなワルを？

本当のワルは、実は自らの失敗を反省するのではなく、逆ギレしてミョンギョ社長にかみついていくマンジョン兄弟。そして、彼らがやっている本当のワルとは、何と子供たちの人身売買や臓器移植など何ともすごいものだ。後にテシクが語る言葉によると、「冊臓は忠清道、目は慶尚道、心臓はソウルに」というからすごい。また、せっかくソミを取り戻そうとしてマンソクの弟ジョンソク（キム・ソンオ）を痛めつけたのに、マンソクのアジトに乗り込んだテシクの前には、ソミの目からくりぬかれたと思われる2つの目玉が入ったケースが・・・。

テレビドラマの延長のような最近の邦画ではここまで生々しいシーンはまず登場しないが、やっぱり韓国映画のリアリティはすごい。テレビなど電化製品のシェアでは、日本のパナソニック、ソニー、日立などは既に韓国のサムスンやLG電子の後塵を拝しているが、ヤクザの世界でも日本国内では天下の山口組が通用しても、韓国を舞台としたヤクザ抗争では通用しないのでは？

■□■子役の演技と泣かせどころはさすが、だが・・・■□■

『冬の小鳥』（09年）を見逃していた私は、そこで一躍有名になった女の子キム・セロ

ンが本作でどんな演技をみせるかに注目していたが、その演技力と存在感はバッチリ。孤独を表現するのに、テシクは男だから無口で無表情というパターンになるのは当然だが、ソミは小さい女の子だからやはりしゃべり方としゃべる内容が大切。つまり、自然にいとおしさがこみ上げてくるような一途なしゃべり方や、子供のクセになぜこんなマセたセリフを？と思わせるような演技が不可欠なのだ。本作におけるソミはその両者とも立派なものだが、とりわけテシクから無視されて落ち込むソミが、「おじさんまで嫌いになると私の好きな人が誰もいなくなり、胸が痛くなるから、おじさんのことは嫌いにしないで」と訴えるシーンはついホロリとさせられてしまう。

しかし、本作最大の問題は、なぜテシクがそんなソミを救うために命をかけるのかという本作のテーマが少し見えにくいこと。テシクとソミに共通するキーワードは「孤独」だが、そんな唯一の共通項によってなぜテシクはソミのため命をかけるの？本作は韓国版『レオン』との呼び声が高く、韓国2010年下半年の最大級ヒット作とのこと。たしかにテシクのアクション、とりわけ後半のラムノワン(Thanayong Wangtrakul)との対決シーンにみせるアクションはすばらしいが、テシクとソミがなぜ惹かれあったのかという点の描写は、12歳の少女マチルダと中年の殺し屋との情が何とも味わい深かったリュック・ベッソン監督の傑作『レオン』(94年)にはとてもとても……。

■ラストには違和感が……■

本作はつまるどころ、孤独をキーワードとして、ソミと心でつながっていたテシクが、麻薬事件に巻き込まれた上、ワルたちに拉致され、目玉の角膜移植の餌食にされようとしていたソミを、命がけで救出するストーリーだが、マンジョン兄弟を中心とするワルたちと共に、要所要所に登場するのが、マンジョン兄弟の部下であるラムノワン。このラムノワンがあわやテシクと全面対決？というシーンも途中で登場するが、ストーリー展開としてはそれは「お預け」とされ、ラストのハイライトシーンで元情報部員同士(?)らしいプロ同士の対決が登場する。このアクションは見応え十分だから、その後マンソクがテシクによってなぶり殺されるように死んでいくシーンはあまり面白くないが、私がへえーと驚いたのは、その直後だ。

ソミを救うためにここまで獅子奮迅の働きをみせ、マンジョン兄弟たちワルを一掃してしまったテシクだが、既にソミの目の玉はくり抜かれてしまっているらしいから、ソミはテシクの姿を認識することはできない。そんな無力感と絶望感の中、今両膝をついたテシクは自らの頭にピストルを向けて……。しかし、待てよ、いくら何でもそんなラストは、ちょっとおかしいのでは？そう思っていると、実は全く違うラストシーンが用意されていたのだが、このテシクの自殺するシーンをあなたは どう見る？そしてまた、その後に訪れる本作のホントのラストは？

2011(平成23)年8月9日記